

熊本市を流れる川の水質の歴史

数十年前の熊本市を流れる白川や坪井川の水質はどうだったのでしょうか。

明治から昭和初期にかけては、水質を測定する科学的なデータはありませんが、熊本市の人口も少なく、また、家庭から出るし尿も周辺の農地で肥料として利用されていたことから、きれいな状態だったと推定されます。

しかし、戦後から高度経済成長期にかけて人口が増え、生活排水や工場排水による河川の汚濁が進みました。河川の水質は「生物化学的酸素要求量(BOD)」で評価されますが、当時40mg/lを超えることもありました。



昭和50年ごろには、熊本市の人口が50万人を超え、中心部では下水道も整備され

ました。しかし、下水道が整備されていなかった地域を流れる井芹川、藻器堀川（しょうけぼりがわ）、健軍川などは、魚が住めないほど汚い状態でした。（右図上）

現在下水道の普及率は80%を超え、工場から出る排水の処理も進んだことから、ほとんどの河川がきれいになりました。白川や江津湖には鮎が遡上するようになり、白川では鮎釣りを楽しむ人も見られるようになりました。(右図下)

しかし、場所によっては、ごみが捨てられていることもあります。これからも、自分たちが住む町の川を守っていききたいものです。

熊本市内の河川の水質

昭和50年ごろ



平成18年度



-  BOD10以上：魚が住めない
 BOD5～10：魚が住みにくい汚い水
 BOD2～5：コイ住むやや汚い水
 BOD1～2：アユなどが住むきれいな水
 BOD1以下：清流のようなきれいな水